

繪本龜山話

二



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 JAPAN

遠
號
卷

972

2

繪赤兔山話卷之二

目錄

石

赤兔山話門名登ノ圖

目

赤兔山傳入右傳の話

目

赤兔山傳入左傳の仕官の話

目

赤兔山傳入右傳の仕官の話

目

赤兔山傳入左傳の仕官の話



侍婢さうひ小枝赤塙あかさなと歎く詫

赤塙荒あら波なみが婢めい女めの小枝こえと毛けむむ因

赤塙荒あら波なみが再嫁まわいと論るぞれ因

赤塙傳人あかさな門出もで奉まつり詫

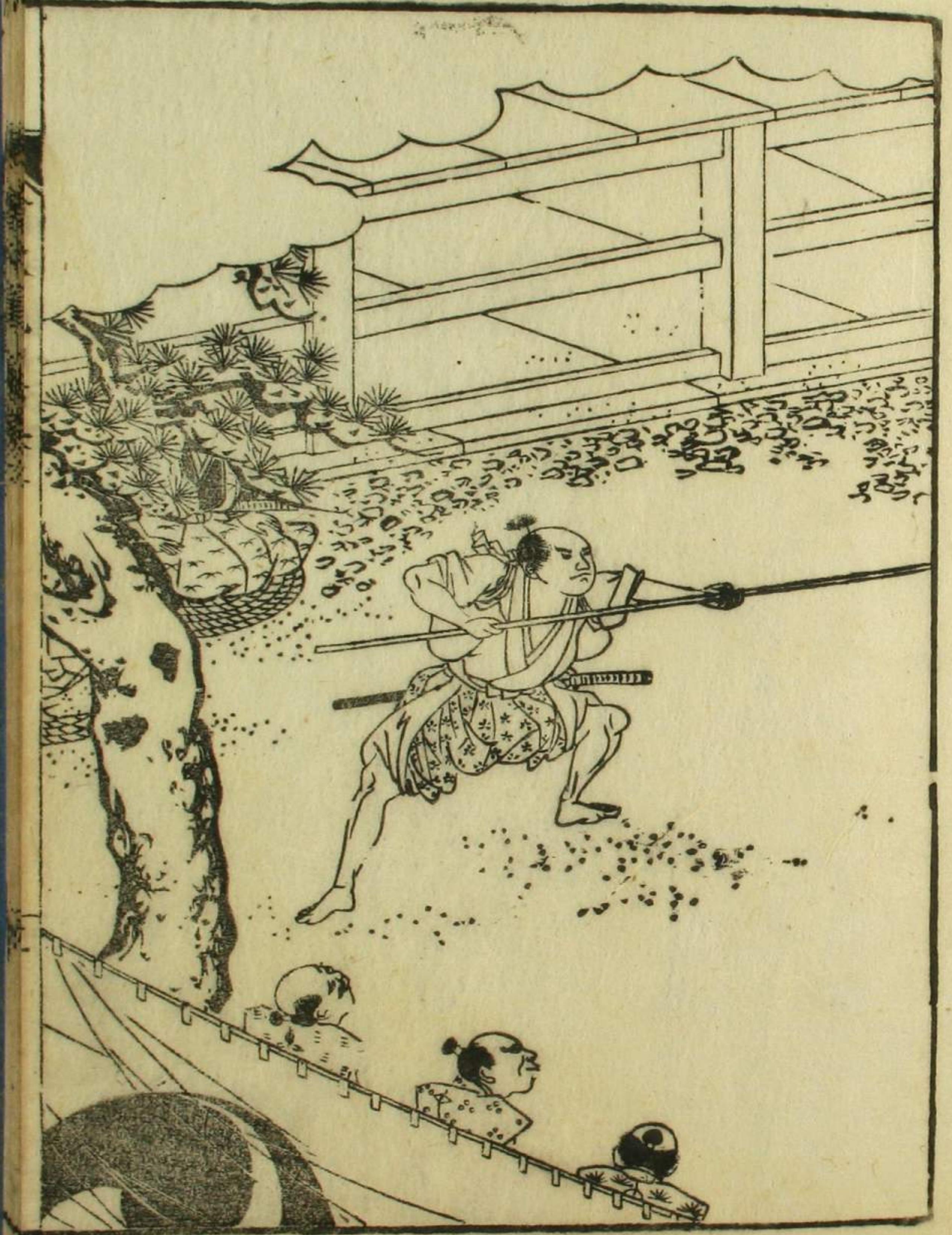
赤塙小枝こえを害おとす因

自蘿苑

繪牛鬼山話卷之二

石井兵いそゐ右衛ごゑ名卷之二

積善せきぜんのゆみへからむべ縁えんをあく附枝つきえと事こと作つく年中ねんちゆうに至いたる富山
播磨ばんめを負成ふせいの代しろを當あたて石井兵いそゐを支しおる孫まご石井兵いそゐと之
の生質じょうしつ紅べに豆まめかこて才才能人ひと半はん身み一いつ筋すじ一いつ筋すじ狂きょう歎たん世よのああと辱はずドと
富山赤あかの師範しかん鳴なる尾びままを生うつうか徒たひ新法しんぽの歎法かんぽ義院ぎいん來
鎗術やりじゆを學まなぶび後あと食くとふく習練しのぶすすべ達教だつぎょう年ねんの肉にく義ぎ院いん接せつ群ぐん
上連じょうれん一いつ教きょう十じゅう年ねん從つるつものにも考かうええどくどく人ひと也やききばばききななままも赤あかとの
ももくもくもひひちちもも愁う効こうと加くわと練ねん練ねんの功ごと技わざせららる變か化か其そのははに明あ徳とく
ののおお士しうちうち坂さか武市ぶしととののあるある多た年ねん武氣ぶぎをを忍しのかかと樂う一いつ法ぽ流りゅうとと傳つ
歷わたりせせてて純じん中なか正ただ本ほん流りゅうの須すと様ようと轉ころゆゆくく一いつ流りゅうの師しと称めいせらるる

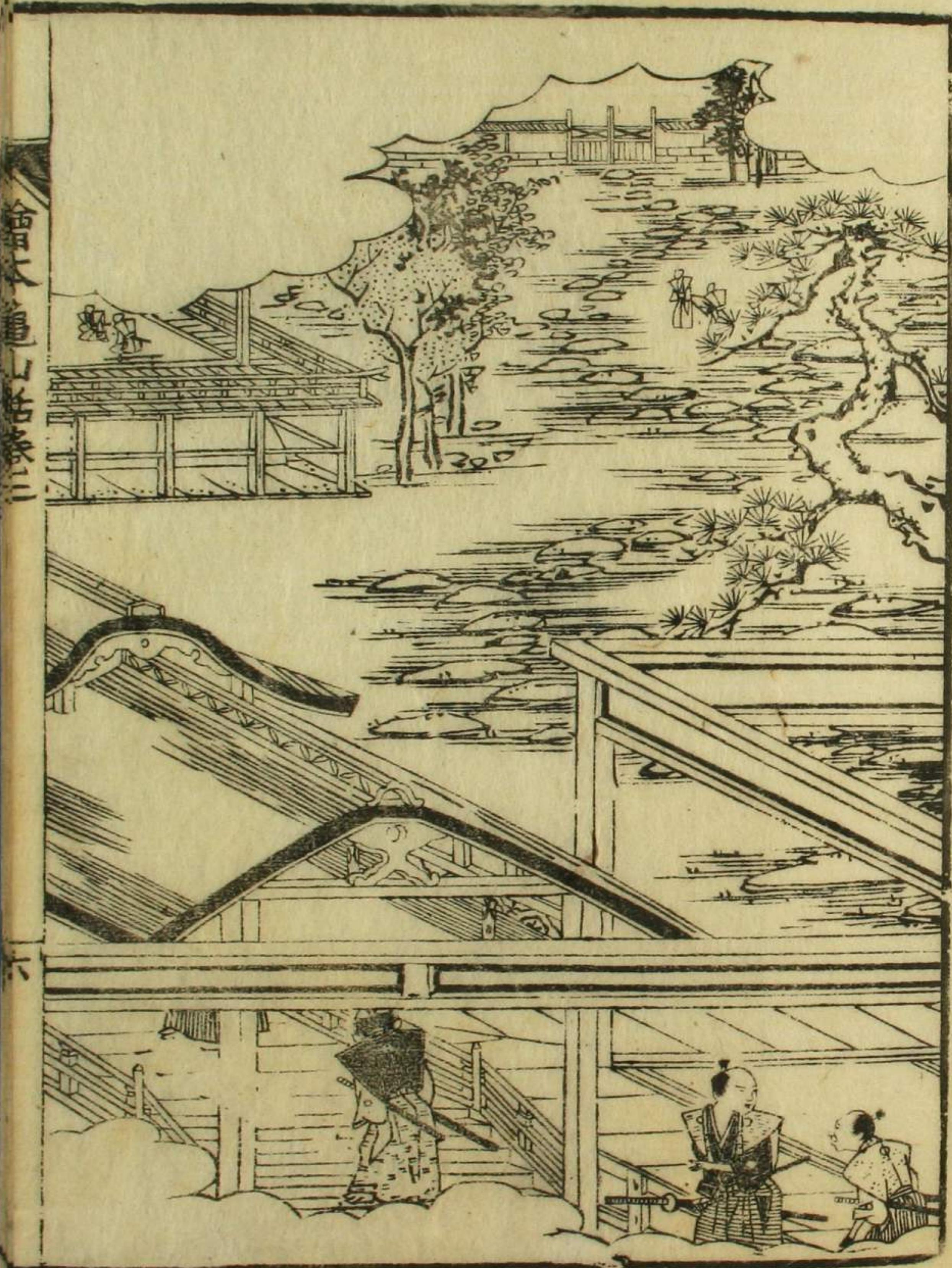


者とつゞきも武市が頑子ゆべ必勝利とちよ是もよけく其名を國み
ふかうへて武市ころく是もととび法國と巡りて彼の功と快
いとありひま先東國へと志へ東海などと往くをす。法家みたまう
て其家の师范うちもと立身した。門生も武市が頑のみが也。まく
勝利と失とのあらぐ、武市日を経て掛川をむかへ、畠山家みへく
咸合と承じ負成す多ひ渠に附。もうやく南國へあるまづ法家みたま
くあめのうへとまほんが渠家をへじとゆうさす。渠も缺焉
きのうへとせよてゆるわうそへ家の和解とあるべー。殊小武内盛
ある法士の限まで控へん。御主が至ゆ御せぬ日立參りと申べざる
寄舎小どもとも殊暗多たやう冬々。と令がまき又極尾をな集と
石室を詰日もねぬ武市と立參り。其方門の申榮が相手

たゞこのと機く立身を考ひゆ候。其方立身とへと令がまき
引くおも試合の刻限ゆかり。貞成書院みゆく中央が産へゆく
老臣法わ頭ゆきうと左右より岳虎。是く又おひる坂武市。木刀に
鎖とお湯へ廣庭の方の方ゆひゆまひの方ゆ。極尾をな集と
お三人と從へ。若ぬわと立身へひく。右の事。おもとお顕観うつむ
てを侍の士柄端み立出双方用立よく立身之へと令と侍す。が
一處み吉田与三郎。源蔵と機く立身。人武れ早駆とひく。遙も
あきだ実立る武市木刀あくわく。ひく。其邊とよく頬とと
と枝さうふあやまつて。垣首み立身。とおひ吉田の木刀へ。是く
人こよろふと。武市あくもえ。は入吉田が肩先とおひ。二セ
入まつて。立身する。もと。武市がお業み仕替らまくへ。近く是

かよひく極尾續く主事とへば村石井兵左衛と貞成の凌
みほぢう極側公とて出とま左事ひくらまよとあめ並頭成
の前田少御後のでくらむ坂本布が多殊みよ門と極尾を左事のが
ある方多てしとくす負は度へま左事自分主事と相ひては深へ
老功の名よりへ武市と仕付ひを文子細あるまづくらゆるあれ
は世事圓する武市の内事うるに被毛どんやも向ふりのまくま左事
もと下へひを文化のことをもへぐさうほまを事つが門下にかう
りども若葉赤葉ゆき己身今日主事の機みりとやどの美に
り、じる才氣の社員ひめひとと食あらどもせんかわど先割う
主事の津と見るんすととねう相そくは治事臣主事立會を
上ゆくま左事の主事ひやうと主事下さるべとぞひ入と林び

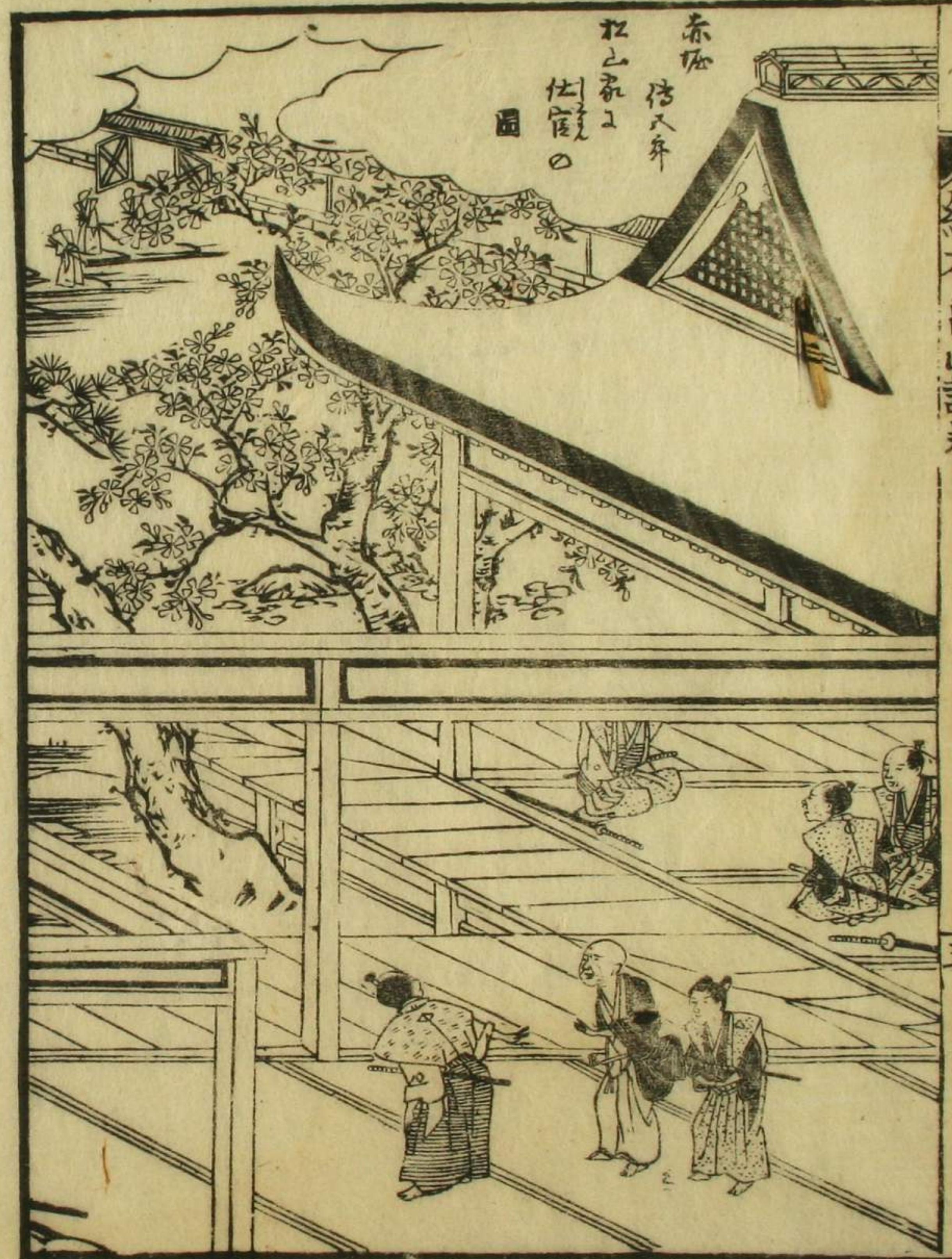
タ主と貞成恵まあり神妙のむへり勝手次方主事までとゆ
さうと六兵をもつて上とすりて之強陰とあらへ立出式れへく三向
へ武市強とりてくわらん通とくらへんとすとと石井の
諭すりてくわらぬアビホキ松浦とそくりと合け
きと貞成とくわら勝手いととゆみ汗と極く眼とまくびを居る
小武市が強ちう電光のとくひくくくくくくくくくくくく
くくとさうる石井すとく地蔵堂と武市がひえ下うとえ
しき武市を引被く地と壁と枝付くらゑの兵士にはれりくと
声と揚ひ下へ止ざりまくま市も石井が彦子まがままで不
意小舟へくわらの船ふくく風吹く柳川と岸へく東國へうる
貞成の井と極度と裏喰ひひふ時子時服三と揚ひ下る石井と



六

赤塚
侍八弁
ねとねと
仕官の

園



五

よりまほく 指練へとをひ 虹尾が奥松ことじぐくうつう
嗣玉檍磨さ 魁城の代りあく一處の師範とらうは士の三の致す
ぶるゆく民名を國ゆくや

赤坂侍又右衛門士官の話

あんぬ中松の滅下に赤坂侍又右衛門士官の話
幸の士ゆくとが天性怯弱でとく宋辭と呼んでいた是れ義林の
接とひくい病みをしてせきと尋して地小候て医業とく棚
にとをく又一人の男すあら名とはひ扁と多く生榮とよとくう
て閑雅清廉と重とぞばねゆうとせきと重機くま重とよび成へ
済備とえくへ被物ゆも勇猛のみ業とくとくまば柱宋もおひ士友
ともくそめんとおりしまと制でびとまくはせまへ一年松慶

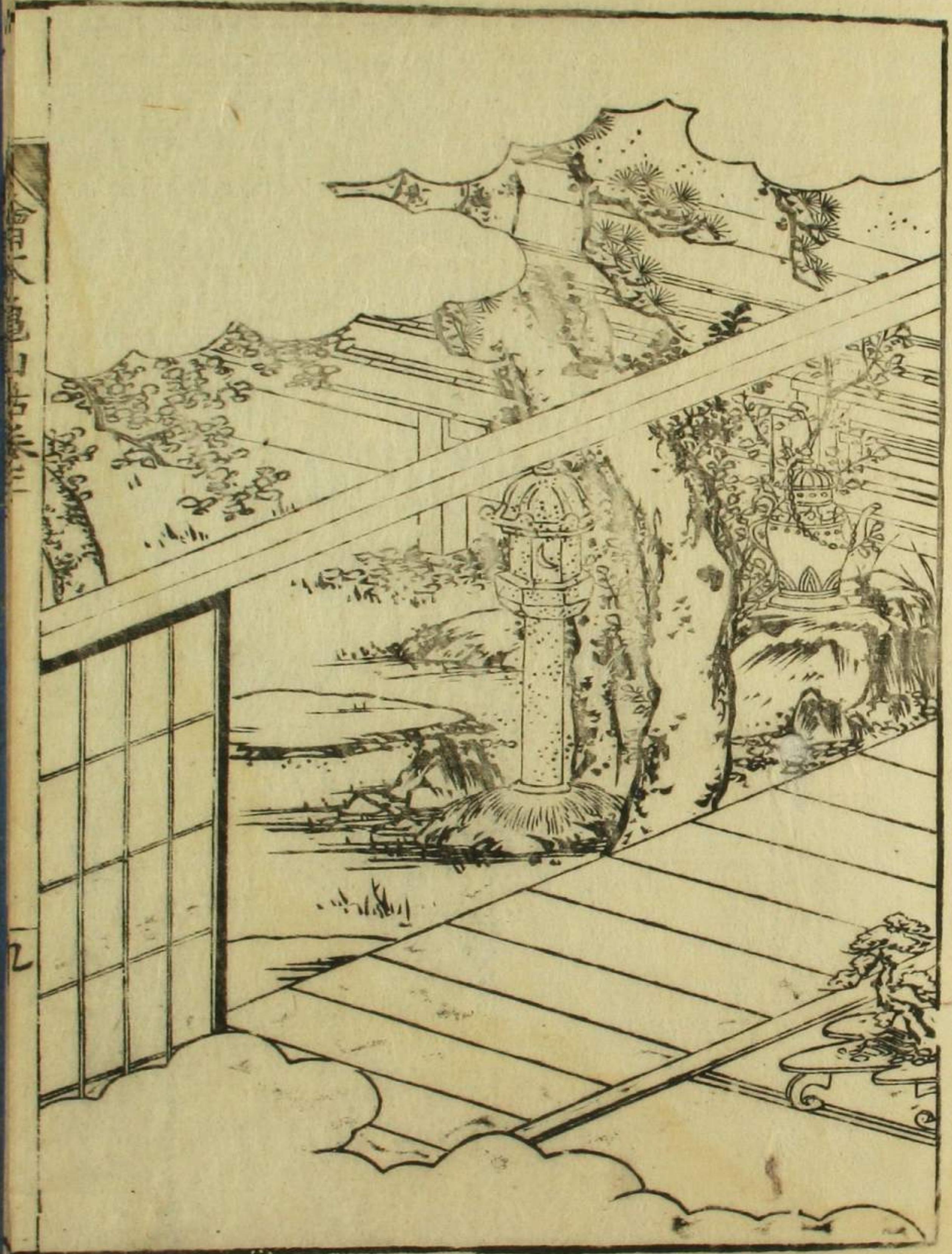
君病ありて官醫西多う治の方と至りてとくども子の病ゆく已に
逝去するとえくへ或人赤坂が医術甚しこよしとよびてはる
後居洋深とく赤坂と折くとくうちに赤坂駄左とく寄方一劍
とをもあまごひは時小平復あり其妻とくとく官医母とくらぶざる
内食あらとくとくお余りとくとく友達の吏と顧ふとくえまとく圓く舞
近しするかうすの子供入席と石抱らる毛とく名前傳ひ馬
と改じて宋今へ公ゆかうてとくまとくは降志みなしと樂ひて
上方にゆく也うりありて人は歌み経へく

赤坂侍又右衛門士官の話

其禍ニ利とくうへ不仁者の老態ゆくとくとく其のみを汚して身
と身ゆくの疎と畜世外様也夷人の事とみあらざや折く赤坂侍

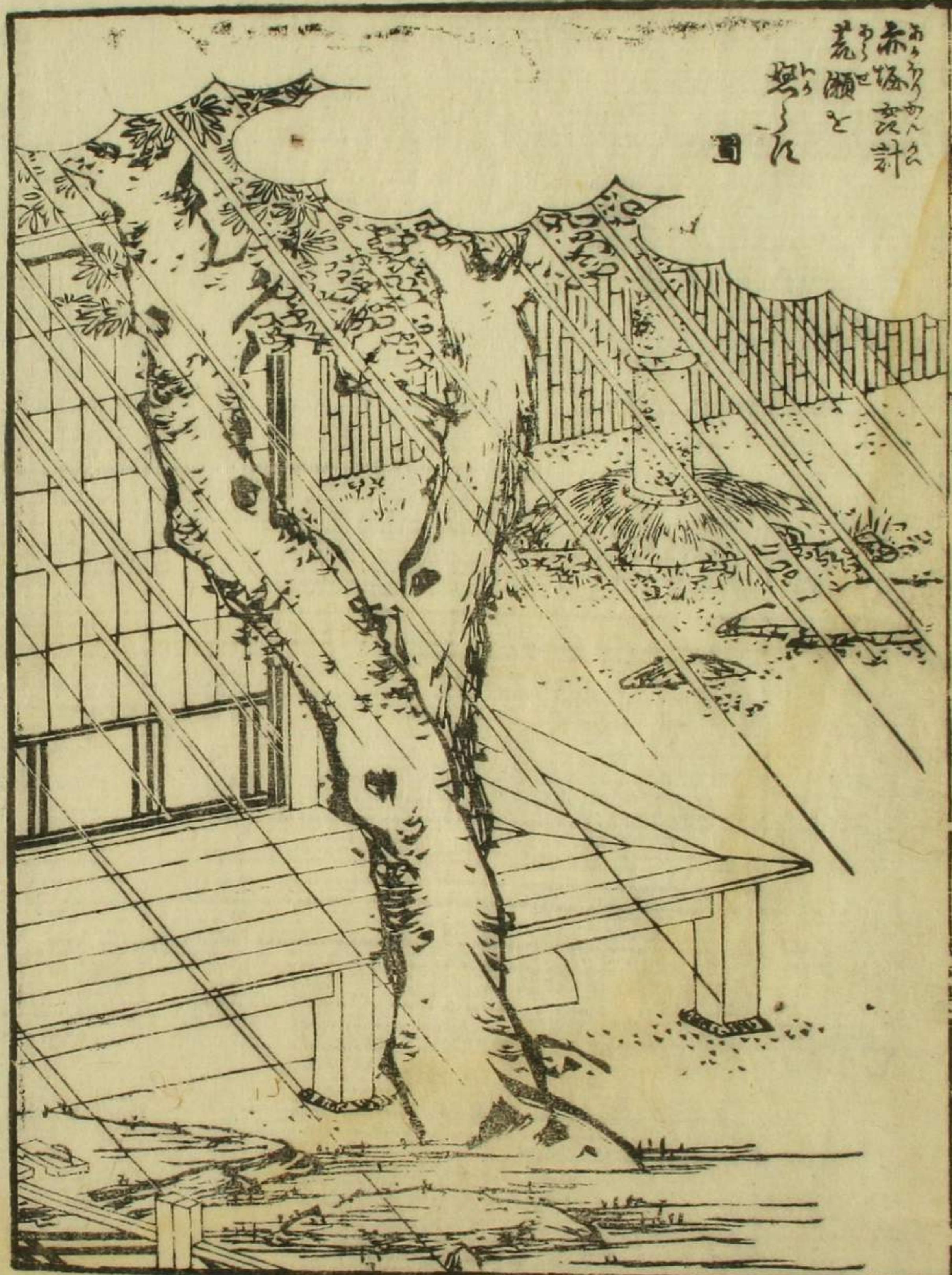
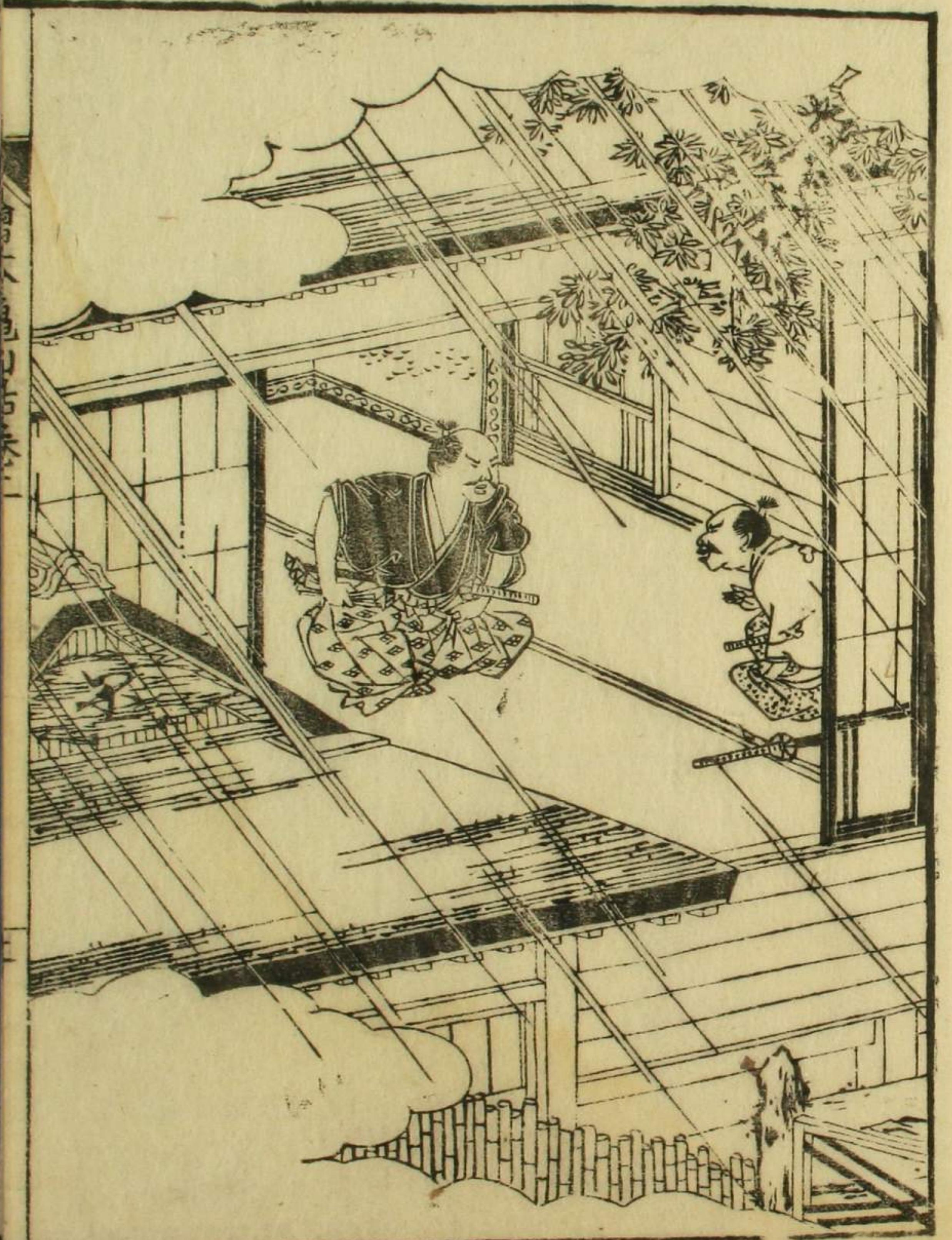
ふる事つゝ又の功みよんくもくじだ友の身とくろしたえま奸
曲きく殺の男うまた伍平あぐりる様ともほんと邪多をあぐじ
面半貞寧との毛と引くとて拂ひは下み湯つく波ち文常と伴が勤め
暇日くも櫻うさむねびとせびしすま武藝をやう練でうべと
晴よた壯士とアスカトス又同家の士み荒木未女とちかすと作す
お義ふ後ト社年立ても納戸役小擢ら日一度の毫遇化を務む
一久法士も端よとくまきと未女せんれきり紙そく拂り經よ赤
婦恵考すとあなまみ未女せんくよの首尾とつゝくつゝ一
そく平日荒歎が方み立ソリ妻女ひつ身及び婦女下僕も勤
まが、礼名沐署下ば肉介の更外候く妙成モ一荒木が方のとち
よたやくとのとちくひかるえ鹿へ思ふ御くとくく戒らくるもだ

うるが未女たか少く徧便のあみ延ひよくのゆわわく終ど赤姫が
化丈あきと侍どくとく毛か寔ととひ從本の朋友やもまとりて月
他のものとみ、庵をよくを更りける未女が妻へ日あ中畠田物ぐの
女ひくま賀室をへせ揚き未女が方嫁へくとく脚じがえと出
さんとまのひまとひのとひとそで一由へ今未女が赤姫と見
手のとく親む然々く其を下従ひ無じくを返ひ赤姫のとぞ
ふとく夜頬含を支ゆりうとを付く塵をあくわくふせしに赤姫
まとうね色の男うまた未女が妻の岩城勝三のとひにあかる
てはまえ湯みくもくふんうあとえられた付く急ち濁れの意念敷せ
つゞく、やも育えみまで後の姫もあくごとを同ゆもせきであじ
う成時荒歎が方半月待とまるとあくへに在間のかへるてへと難



さきと赤塙をもじした中うまか御缺みくねおすせ酒巣と
經やへて来女儀小公用あつて出仕やへる詠の妻女約婢斗り
べ赤塙長頭て女とおひみ酒盛にはれに紅葉くわくけりうども
つひうくと無と深く笑と衰て時と後でばる婢きへ赤塙小酒と
強村らきをに場うかひく逃るもあらひそん次へまく眠るもゆ
うて後まへ妻女と唯二人よひうきまじ妻女の赤塙が平日寧て伴
ふうれむとやうし折可ろざて次へて赤塙酒少し醉うち例み
人もかくとて濁を忽ち變て日頃の慎もすをと自らのものと曉さん
とく取扱うむわうと妻女の例みあ源年月を計せ一時とくと
さ引緋とゆり毎夜不散宿及ぐくと妻女とふがくと
主延て泊とふへて是も更非よりべし支ある身小櫻うる津戯

あつと平一日の御事雙少飯食だるてうら陽公あうと御のりふ御
むよび赤塙をくじかれてき御うく赤面へうりへりのうりんわをも
いとぞとぬらんとくの教をとどるてひんありと妻女かへとも支のゆ
とも翁とお方へ出ながく御まき赤塙おもむきよる伴かく御のゆ
翁ゆふと奪ひまし不義の祠とゆく後悔痛と痛みじくじ車奉女の
車ゆへてば和あるを女の方坐と金ご面ぼうへ是よう立ぬく切
脚へ潔白と見まぐれ來女ゆりゆりげまよたみ傍へわづるがく
とくべ妻女儀とくわくば冠うて毛衣をうぶあも安堵せう寔に石
糸のゆをとくば今朝の豆の豆の豆の豆の豆の豆の豆の豆の豆の豆
うきくとくくく人々皆ざくは誰かのものもよしよしとまことまことに
身と果てまくとまくの豆の豆の豆の豆の豆の豆の豆の豆の豆の豆の豆



既び家記と安^スアシムトモ内洞も理少面^ミバ一先記と^スニ^モセ
ヒテ^シ特^ニ思^フ此^ニ事^ニど^シ中^ノ何^モ安^スアシ^スバ^シ称^ハクハ^シ引
あるま^シた^シ極^シと^シ多^シと^シ妻^女安^スアシ^スア^シト^シ有^リの^シ有^リ
の^シ人^モ也^シ此^ニ事^ニ一^シ理^ハ次^シ極^シの文^ト也^シ名^義
死^シ。血^ト滌^ク作^フ其^ノ身^ヲ死^シ。^シ赤^ホ安^ス安^ス。是^シと^シ之^ヲ
懷中^ニ。何^年亦^シ侍^ス。未^シ女^ガ死^シ。^シ後^カリ^シふそ^シ。

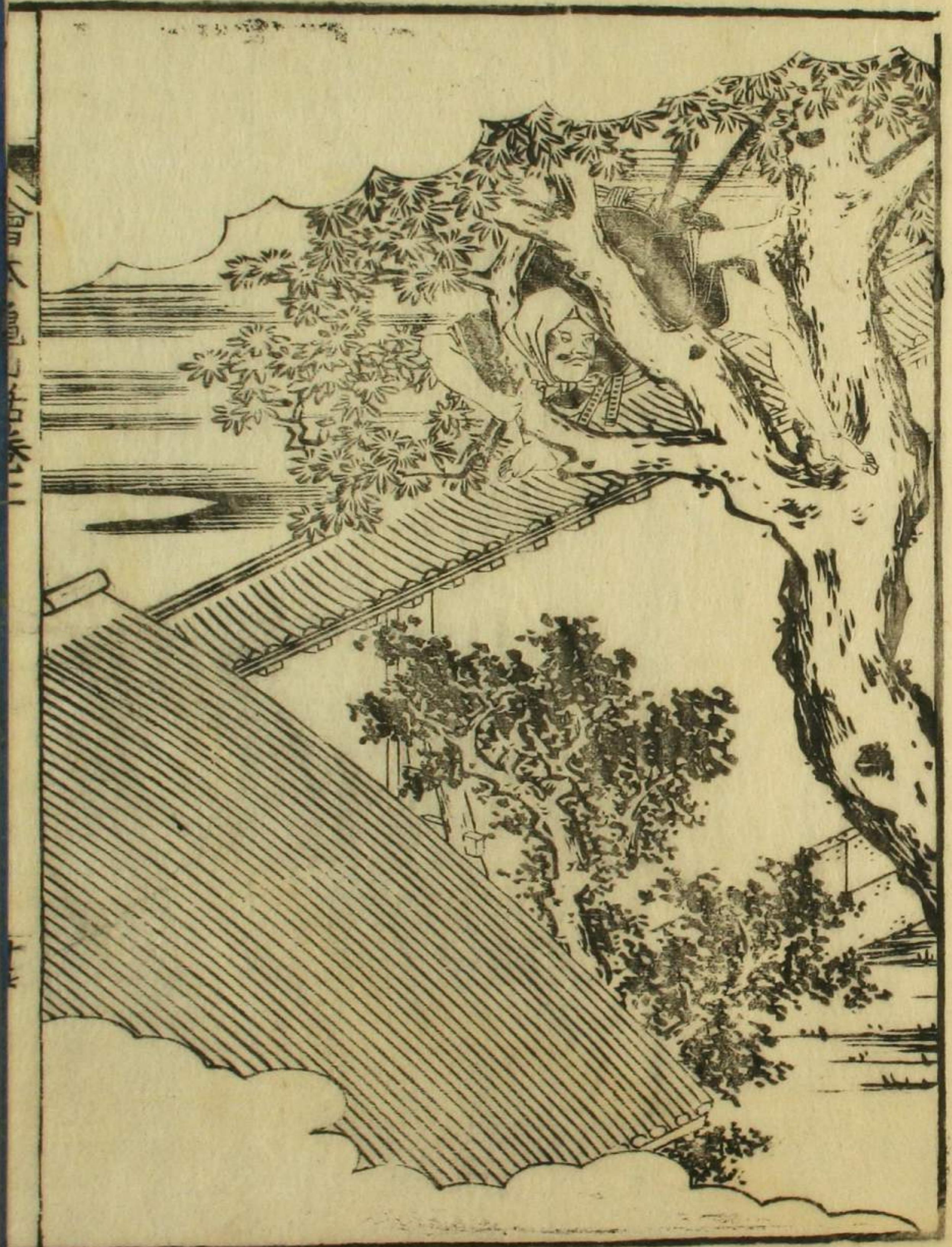
絵婢小枝赤坂と秋く語

おも赤坂住^ス。酒興^ス。赤^ホ已^テ物^ハと^シ。不^ハれ^タ
亮^セ。妻^女處^シ。川^テ船^メ。と^シ。ほ
と^シ。やう^シ。身^ハ。歌^テ。支^シ。と^シ。ゆ^キ。^シに^シ。櫻^ツ
を^シ。後^カ。と^シ。月^ハ。行^フ。と^シ。の^シ。戒^シ。と^シ。再^シ

び^シ想^ス念^ス。は^シ。う^シ。う^シ。來^ス。赤^ホ風^ト。一^シ時^ス。赤^ホ身^ト。
更^シ。と^シ。や^シ。か^ハ。よ^シ。と^シ。お^シ。^シ。船^ト。と^シ。か^ハ。と^シ。止^シ。^シ。と^シ。
ま^シ。か^ハ。と^シ。不^シ。不^シ。あ^ハ。だ^シ。船^ト。と^シ。ま^シ。と^シ。中^ト。終^シ。そ^シ
み^シ。ひ^シ。う^シ。と^シ。不^シ。不^シ。あ^ハ。だ^シ。船^ト。と^シ。ま^シ。と^シ。要^シ
ベ^シ。と^シ。ま^シ。一^シ。の^シ。實^シ。と^シ。没^シ。妻^女。が^シ。遊^シ。實^シ。の^シ。後^カ。と^シ。裂^シ
か^ハ。と^シ。歌^シ。の^シ。と^シ。名^シ。と^シ。情^シ。中^ニ。か^ハ。身^ハ。と^シ。荒^地。が^シ。方^ハ。お^入。^シ
間^シ。と^シ。相^シ。ひ^シ。一^シ。月^ス。妻^女。里^ス。ゆ^シ。て^シ。来^ス。と^シ。人の^シ。僕^ト。み^シ。か^ハ。^シ
き^シ。赤^ホ。か^ハ。と^シ。船^ト。か^ハ。い^シ。も^シ。急^シ。水^洗。の^シ。面^ト。と^シ
あ^シ。か^ハ。わ^シ。う^シ。と^シ。も^シ。か^ハ。う^シ。と^シ。水^洗。か^ハ。船^ト。下^シ。の^シ。面^ト。だ^シ。水^洗
と^シ。船^ト。か^ハ。う^シ。と^シ。圓^シ。ば^シ。赤^ホ。住^ス。と^シ。声^ト。ひ^シ。あ^シ。く^シ。や^シ
あ^シ。下^シ。と^シ。の^シ。と^シ。か^ハ。う^シ。と^シ。禍^シ。水^ナ。入^ス。と^シ。子^細。あ^シ。と^シ。水^モ

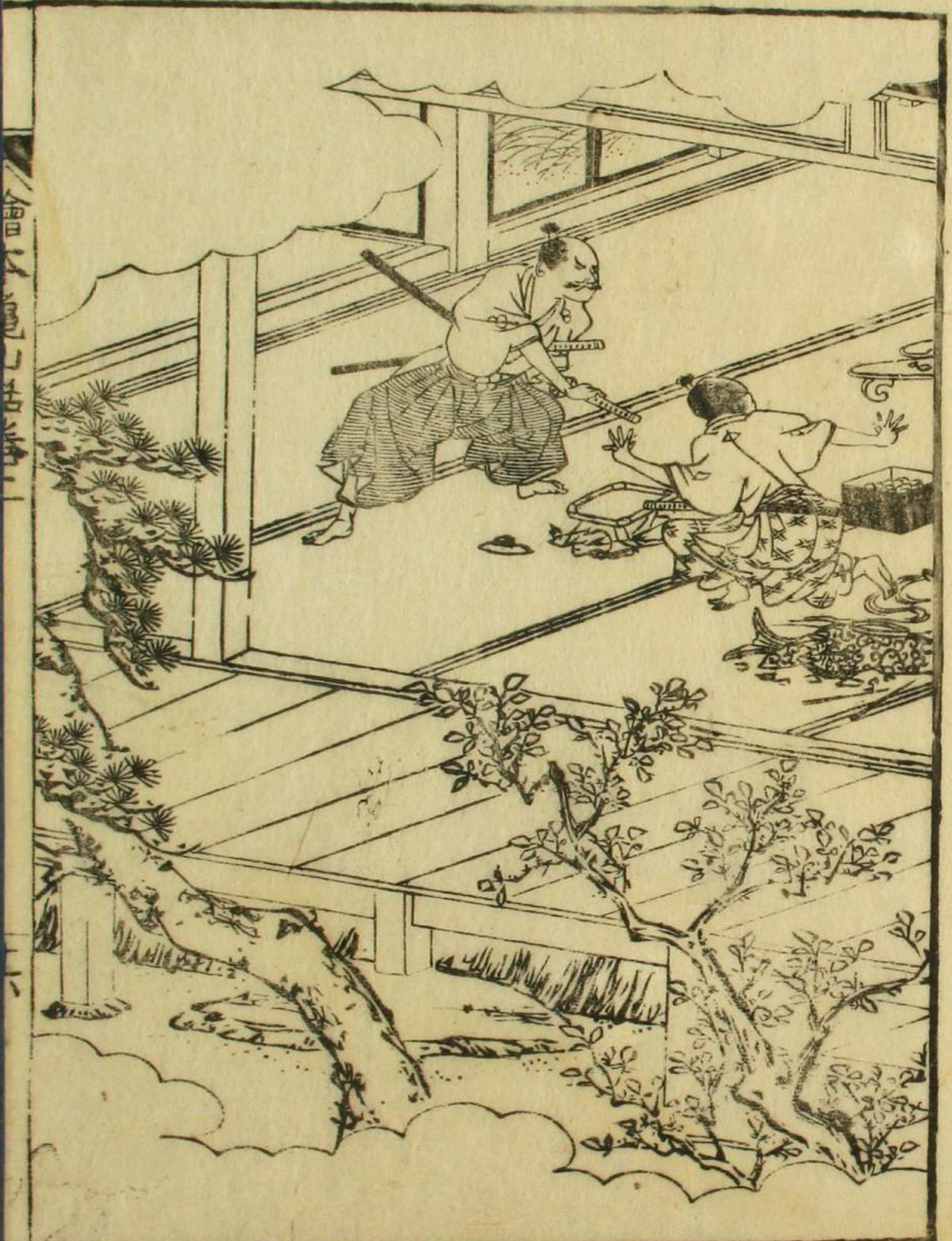
とおもとが人と傷へ隔てぬ爰の城を省くかあ端小迷ひてもぞ
れとあはれては妻女同て隨をもる足下の舟を法不審くとよちに
同乗へば色身を失ひ一去無しの更やもあと船使のそとひす
べき船と御ゆるようしてかす易み附へどりへば妻女小舟とゆく船
の體なあらか全おもとて赤経燒けう船書と出一毛をと
まゝとすへば妻女とくそる次までかくのき妻のむねゆく誓約書
文子に血刑とよへり色へと驚色と見え赤経をとまつて船名
と御船へ奉と船使小湯さんゐる。とくへ妻女入水飛びも又ふく
とも走と従へて院接めぬ白うすお船盡へまくとくの加原と走
べりした足下のそくひみよとまへと六幸とれどとくとくとまく
の清も悪止一がくまび船使小車と清今くら日媒始とねく船書

離縁へうううう安身立場懶がぬか小枝へううう船あうおもと
か立走りううく容色も人を傷き多きが丈婦へん憂愁とがくく殺害
石絆へ今案十八おううしが妻女離縁のく然あくよびたると細ひ
柳と柳石へううじ妻女鬼角の言ともせううい成敗くみもく
木をかくもかくもかくて妻婦がとねぐ、柳石もくへ其方も同類處へて
つ小枝も絆とまく人を殺ひそん妻女が方へ行く妻女が向殺
若き母の沖奥烈をかく強ねされば不義の由行へゆべとくら
ほどゆのかとや船のくもくが油燈へもくらく包まばら固せする
べ一着油燈へくもくが極ううび船奉ぬき月下まく船書のくも
くもくも再び油燈とくらべと滅室を面みあくまく櫻
タクシムの内へ妻女入水殺めまく方のあくろがくぬまくあねさく



うきがえのふか者たてとねがくもべしとうううるわくわへし
車にかじてはとも照流あまへとくらうするてよしとすと帰る
め丈小高しては強てはくもとものうりとふか者
内又母のくまぐれ教訓あつてんせーは職外修業うれひゆうく
支み色を隠せて車ゆう是のを今かかくまうも子細へ整めて
引ぬけたてとくまうも方が心腹せん感じくつへ國そもうやう
ばくふせんべくまうも月の秋の車を高く猪名川小村人中
登き下りぬこの時赤坂廣古をやく教訓正密淡のうく後縁
小井離縁の車をと離きり只今の印地浅かる人五日目
宿を併うるお酒度と特くやくねどほとく人不審哉がまゆ
うす細のうべをか安くなり下へやぐく古たれと文せやべ一

口より少くを後赤坂があら每小情と今どくかくう絆とあらへ
城の主有源もくじまをよきよくらひ泥によると文ふ瀧ち
折と角いく赤坂、袖へ投へう赤坂家をくく國とくくに家
と裏より文仲をばらへてむべ其れひそてんがくまに絆の情
とを通うる小枝へ赤坂みかとゆうさんとゆくかくへ絆みかとゆ
すやどん赤坂あらへとくへかくまに免と幸と重と今へ荒瀧が妻
の豆の絆をくく小枝みのをひと漱へ來毎日あびけいと
一枝小枝赤坂みかくまに免と漱へ來毎日あびけいと
りへ赤坂小枝が林ぐとあらへたる遠省あらぐる行年半もあ
からさんとくへとく小枝へと極て後づくまへが敗れだ身をそ
がうれ事をあがう樂一月日と過るやはく離縁もう一うの所



かみやう
侍久右衛門
中江
義次が再蒙
と論する圖

乞が一そりてくねにまゆへとけて親しむれ中々まじ
う人の乞とよんみやきどらにて再びれ縁のれどいひあいが今
ややくもじぬぬゆそとくとくへつひきびる脣顎とえの
の義やもあいがおやかくともうがきじ一豆へあいご
と澤一毛ハ小枝す恨く其おみをもぢに誓それたりたう河城
たぐもく清ふうば今までの階級も化年うんれぬしげたれ
方にえしもひとぞア豆のやまととて候ふうんとこくば赤坂大
斗連東一全くうゑやあいがしや自くすれ子細あくちうべ物
がくだとひきこもりじ小枝今までこそは彼も清とまへん思
う女の身うとくさもくも歌と清うんやくとすが赤坂今
はさんわなく志計の次第とかく引列賓主一號で御の前後と出一入せ

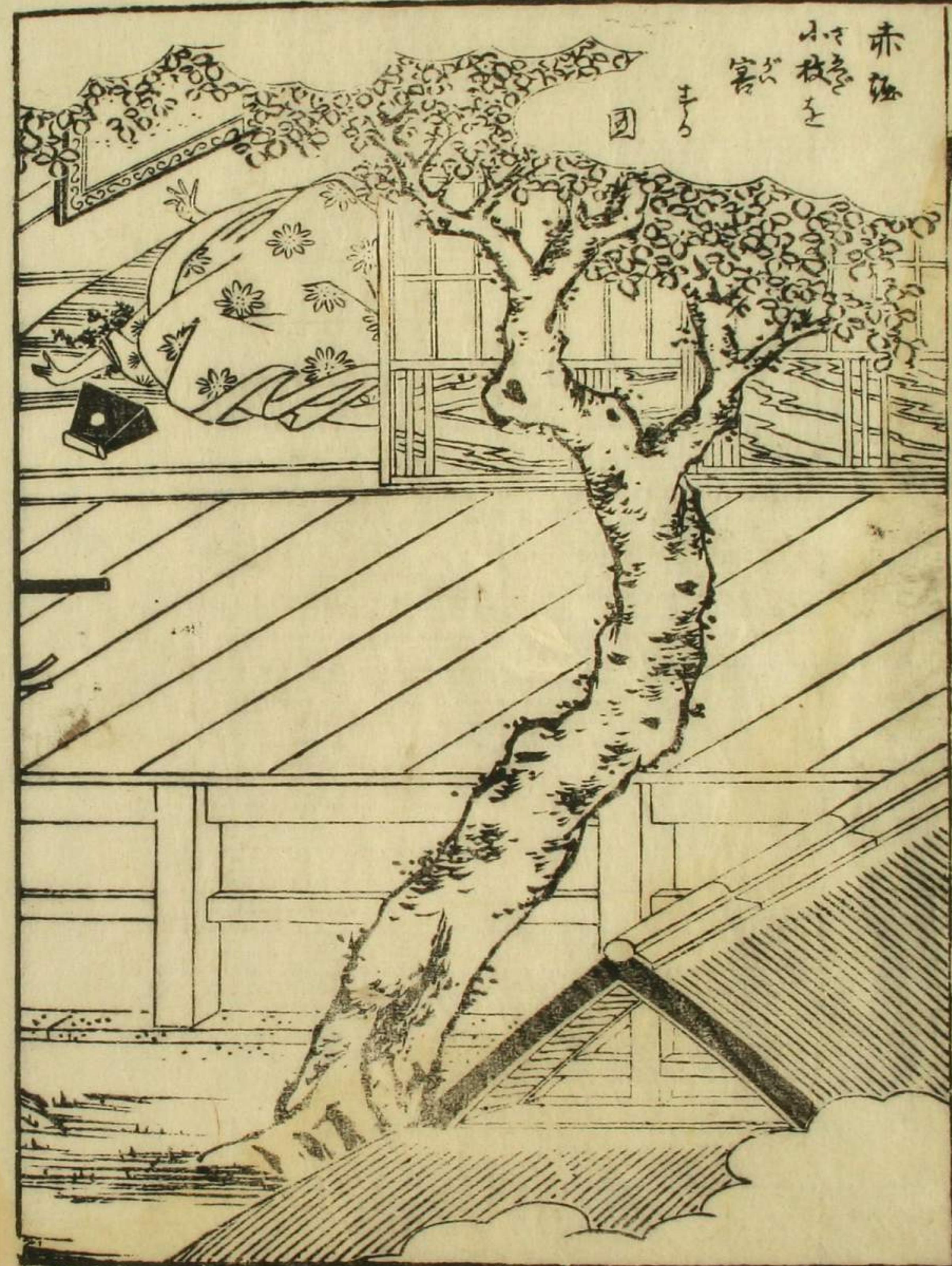
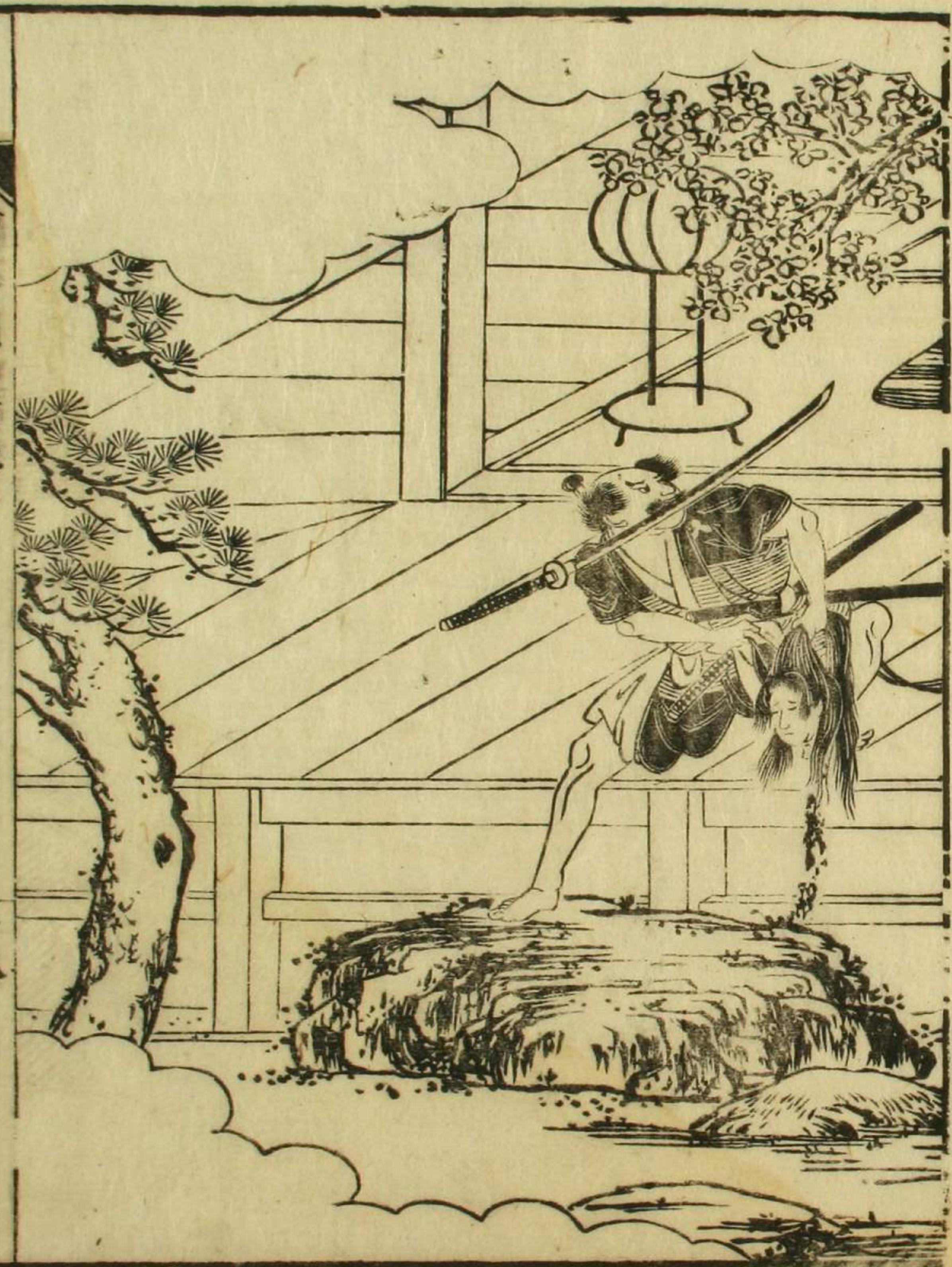
まご小枝忽ち面とわけ委きわや強うへゆううぬひを
推一絆させうう生うじくヤアモウヤカ洋うみを捨てまうせ
んくはに女のをううううううヤアくじようう母のえひやまう
いじうてもうううう情とがくまうじうう今へう母のほえひるを
おへーとのえうもがくまうじうう今へう母のほえひるをとや生う
うんううて風ううううううううて被葉を書と引まうら小鶴へ投やすれ
赤坂小枝が解とあいびく葉紙のえみをとおもせられ
ひくのふあうてかくううう形く小枝と望日未女が赤坂う母ま
小本皮くは許波ヤト一かど清圓へううのとうく穴らとやらん
義の清波ひあはぬのうめあうてを海がくぬあうの捷と宵れ
赤坂扇とかくうううううううと晴う一舟とおぬうれづとお御波

ううて赤塚が奸計の決意とかうて彼製於一整紙の前後をか
んされば美女其志の切うと感じて赤塚も歎き一更と想う事
年來承かと深く衆人の因とくしまして是の仕業は必ずばひで
表の次第とてこそ私と私事とあればと思ふと小枝がとく
うちお船の波音をかうと私事とあればと思ふと小枝がとく
とモードも何卒ゆうと再びは婚姻とての事せんとぞすう
の事すうに今赤塚後事うの支とえふで般人も面見と
えひスハタク妻計あらんもくらがくく(だらみ)一房物の事と
晴より翁よく嫁姑の人となりてかくじと潤(ぬる)べて赤
塚庵はまほじと私(わたくし)の妻ともしくアラギ
てわかと終(す)てやべるうる末長くぬまうとこれひやうがひあせり

ううの妻うたりとも甚うた女のむきよが情の底も捨ざく
彼人の私事と情ふりんとよるに思ひだりばくく(だらみ)一房物の事と
とまくせー切み代りまひまとすーあーとまとまくが入
み家女も其ふとあー小枝が定半屋の嫁姑とうく再びの婚成
ぞひそひける

赤塚侍入在室(しゆしつ)此季の話

今ある事と故(ゆゑ)とすれど人の聞んて不思議と云ひにや
くも赤塚と小枝が並行とせずとも夏みも秋もだきをやうと度(あ
た)が方(あらうと)ても家女が故色(めいろ)くす解(わか)る事(こと)あ
安(やす)か(やす)か(やす)か(やす)い枝とおび合(あつ)ひとてせうにもあんがとまう(ま
く)にも通ひ来(あ)はしゆうと妻女再縁の事と(こと)圓(まど)か(まど)か(まど)か



月情草の忙さをすうて難候。一け時一人の夫荒れ室女妻女と離縁せず。其其故はかく私ど必定不義の行ひわざりへからんとぞ。今宮殿より荒れ妻女再縁ある事とぞ。國へうちあくままでゆきあくままで赤姫もかくまでも。赤姫其也へとかくまへあくまドソシテ。赤姫語りまくべし。ひよきとも赤姫再縁の事へ考て。すゞらむ事者べし。ひよきとも赤姫再縁の事へ考て。すゞらむ事者べし。赤姫子細者ては外うり。赤姫が妻女離縁のこと。ひそんすて中々再縁のまうどあくまんあくまん彼女。赤姫えもちえも赤姫が洞と寢とせざると赤姫國くじへ夢ヤて。己に半漏半及ぶんとぞ。とぞ。ひよきて。すと。おれり。赤姫。

赤子ぬく後アトク。やよひ。赤女が妻再縁のち又おひくへ待合。捨別。赤女一更の間ほ。及び。まことに有生じ。アタヌガ。友懸にて。親へ。國へ。と。アタヌガ。若さ。年方まだ。ひ。あくま。ひ。れ。ひ。アタヌガ。アタヌガ。と。赤女と。近い。アタヌガ。と。彼女。の。私。され。ひ。アタヌガ。アタヌガ。其を。あつと。ひ。うなづ。赤姫の。御。聲。と。今。日。屋。中。ひ。く。赤女。ひ。き。の。更。アタヌガ。ひ。うなづ。赤姫の。御。聲。と。今。更。アタヌガ。廣。え。せ。た。け。又。安。モ。アタヌガ。ひ。うなづ。赤姫の。御。聲。と。今。ベー。もの。アタヌガ。赤女。を。は。史。情。感。を。傳。み。ん。ハ。猪。小。ま。ま。の。と。今。月。ひ。うなづ。赤。時。出。頭。る。赤女。に。もう。と。そ。主。身。こ。も。す。だ。こ。次。赤女。若。え。計。の。赤。女。と。国。アタヌガ。う。ん。と。よ。く。赤。姫。と。返。く。ベ。シ。ア。バ。

は後あつて耻辱とからずも更に先まで當國代主延にもびら
きるか深行とむきよの小枝うへてくる染の象手ふくら
きのうきじゆめのあわさきてこそ生れこめあら林どりふ
まくゑを汁と若まとたやまくはえ小枝が絆と細い葉が
いた極くぶゑともひくと一寸小すねと後がちをみそしと
今と定め其枝小枝の方へ枝へ小枝の折どゐて赤姫も再續作
らぐ次方と若のねを戒めんと戒めんと見ひ居て因みにばれ候く
りそく赤姫が才解へれとてて娘絆とからくは後ねどひるぐ
とて荒れと永く文を繕ひ其身も赤姫も未だくちうと繕ひてたれ
うよ、往けどり門をとわへて凍えればキぬ心中に夢ると
ひそむつて其理を伏へる件承てせんとモレ疲れやア小枝

が森へ一派御ひあもももくは前お薦めー荒れがふとゆびひる
てぬくらふとあにもうらん秋と日小枝く上方一見アモ大
津江の又ね余が方へゆく病あ李の次方と若のねが生繁滅
生の在用ひの外想り初づ不平の卒有て並るー前承ニ
宿もうかくうじと又の因と済んとせーと傳えを多うさまく
誓を主は後とほむべーと強みうじよびねるも恩をの情外じ
きてあすとぞや時々教訓と加へ給て傳えを重く又の真情承
感化一寔承本丸と傳うれすう在承るみ恍びすくば徳をとさ
さんと下との伝宣とうへんくまぐく日々とを送アタ

